新時代の新しい闘い

先の10月に坂井さんより、コトパンジャン・ダム被害者の皆さんが11月にジャカルタで行動を起こされると伺いました。私の回答は「素晴らしい、その頃はジョコウィが大統領になって間も無くの頃で、適切な時期だ」というものでした。

どうしてそのような返事をしたかと言いますと、なぜなら、私たちのこの闘いは、当然続けていかないといけないし、民衆派と言われるジョコウィ政権が、この間解決がなされなかった闘いを支援するための一時しのぎになり得るからです。しかし残念なことに、様々な事情により、ジャカルタでの行動は実現できないということでした。坂井さんからの知らせでは、行動はキャンセルではなく、延期だとのことでした。延期が長期間にならないように、願っています。その計画が素早く実現されればされるほどよいことであると考えています。というのも、私たちはこの民衆派のジョコウィ政権の初期という時期を利用しようとしているからです。この民衆派というスローガン、もしくはモットーが、本当のものなのかどうか私たちは証明したい、そして、私たちの、また「（コトパンジャン）住民の側に立たなかった」と言われる旧政権の被害者たちの闘いに対して肩入れをするかどうか示すことになるからです。

私たちが望んでいる、また必要としているのは、この新政権からの連帯であり、それが無ければ、この闘いは決して解決しないでしょう。新政権の役割は、とても意味があるものです。インドネシアにおける政治のシステムは、現在に至るまでいまだ「ええ、政府の言うことならそうなりますから、政府の言うことでないなら計画は全部キャンセルです、途中まで手がつけられていたのもキャンセルです」という原則がいまだにありますから。

また、少なくとも私個人の経験と見立てによれば、この新時代の闘いはますます重いものになるでしょう。私たちの闘いの外側にいる人は、現在は新しい「弾」を持っています。いくつもの機会において、彼らは「これ以上なんの闘いを？」「補償金の請求、それ以上何を求めているの？」「社会で実現した成功を見ていないの？」などとと頻繁に言うのです。

こういった声を上げる側の人たちは、コトパンジャン住民一部の「成功」を見せるいくつかのメディアによってサポートされています。あるメディアにおいて、本当は私たちに肩入れすると「言いたくない」だろう政府も含め、いくつかの側の人間に影響を与えることは必至です。

そんな現実から、私たちの今の闘いはますます重いものになり、政府を含めたいくつかの側の人間に対する説得も、ますますしっかりしたもので包括的なものでなければいけません。というのも、私たちがそういった人たちの説得に失敗し、（建設当初には語ることが有効かもしれないような）昔の問題を取り上げ繰り返し語るだけでは、私たちの声はこれ以上強く響くことはないでしょう。

このダム建設による被害が、住民の中でまだ急激に広がっているということを声にして訴えるために、（新しい）賢さが必要となります。一部の住民が享受した「成功」は、専らダム建設のために得られたものではないのです。そして、まだたくさんの（とてもたくさんの）住民が、この建設事業の結果まだ被害を受けている（ますます被害を受けている）のが実状です。私たちは新たなやる気で、そして新たな賢さをもって、すべてのことを新しい政府に対して、そして公に広く伝えていけるように、望んでいます。強くそう望んでいます。

闘いのあいさつ
グスティ・アスナン教授